

中学校における生徒の人間形成をめざした 体育の学習指導プログラムの開発

スポーツ文化研究領域

5022A001-4 青柳 柁希

研究指導教員: 吉永 武史 准教授

【序章】

現在,保健体育科では,「生涯にわたって健康を保持増進し,豊かなスポーツライフを実現すること」(中央教育審議会答申,2016,p.186)が目的として掲げられている。我が国が抱えている「超高齢化社会」という課題の解決に向けて,体育において健康や生涯スポーツに焦点を当てることは妥当といえるだろう。他方で,グローバル化や情報化が急速に進む社会状況や,人類に立ちはだかる様々な困難を乗り越えていくためには,受動的ではなく,能動的に人生を歩んでいくための資質や能力も必要ではないかと考える。

中央教育審議会答申(2016)の冒頭には,「2030年の社会と,そして更にその先の豊かな未来において,一人一人の子供たちが,自分の価値を認識するとともに,相手の価値を尊重し,多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え,よりよい人生とよりよい社会を築いて」(文部科学省,2016,p.1)いく必要があることが述べられている。このことから,予測困難な急変する社会状況に対応できるよう,自らの価値(役割)を認識し,多様な他者と協働していく(自己の役割を果たす)ことが求められる。そのため,現行の学習指導要領の柱でもある,「知識及び技能」,「思考力,判断力,表現力等」,「学び向かう力,人間性等」の中でも特に,「人間性」に着目した体育の授業を実践することが必要ではないか考えた。

以上のことから,本研究では,教育における人間形成について検討し,中学校の体育授業に

における人間形成の構成要素を特定する。そして,体育授業で人間形成を高めるための学習指導プログラムを作成し,その有効性について検証を試みることにする。

【第1章】

第1章では,人間形成をめざす体育における学習指導プログラムの構成要素に関する理論的検討を行った。教育の目的は,人間形成を促すことであることが明らかとなり,人間形成の一部として考えられる「自己同一性」は,生涯を通じて形成されるものである。しかし,青年期においては,「身体の形成」及び「精神の形成」の変容が大きく,この時期における自己同一性の形成は重要であるということが明らかになった。そして,青年期の始まりにあたる中学校における自己同一性の形成に必要な要素を検討した結果,「社会性」,「自己認識」ならび「主体性」を高めることが重要であると示唆された。そのため,人間形成をめざす体育の学習指導モデルの重要な手がかりとなる,「協同学習モデル」,「責任学習モデル」,「スポーツ教育モデル」の3つのモデルをハイブリッド化させることで,「社会性」,「自己認識」ならび「主体性」が高まると考え検討した。そして,それぞれの要素を高める方略として,「社会性」に関しては,学習者間での相互作用行動,「自己認識」に関しては,グループ学習における役割行動,「主体性」に関しては,ゲームをアダプテーションすることが必要であると考えた。

【第2章】

第2章では、前章で検討した中学校の体育授業における生徒の人間形成を高めるための3つの方略を踏まえ、中学校1年生の男子生徒を対象としたゴール型のバスケットボールの学習指導プログラムを作成し、その有効性についての検証した(検証授業①)。

その結果、本研究で作成した学習指導プログラムを適用することで、学習者同士の相互作用行動が増加し、他者と積極的にコミュニケーションを取ることができるようになった。また、それまでの経験によって高められた、自己の価値や長所を認識することができた。そして、運動技能が低い生徒でも、学習者間で相互作用行動を実施し、自らができることを理解できている生徒に関しては主体性の高まりがみられることが確認された。

一方で、毎時間異なるチームメイトに対してフィードバックを行うようにしたことから、アドバイスが表面的な内容になってしまった。また、学習者の役割として4つの役割を設定したが、その内容に関しては、不透明な部分があり、自らの役割を通じて、自己の新しい役割や価値を見付けるといった自己認識の高まりには至らなかった。そして、ゲームをアダプテーションすることに関しては、自分たちの課題を正しく認識して、それを解決するためのルールを選択することができなかったため、仲間同士で合意形成を行い、自分たちで主体的にゲームを作っていくことができなかった。

【第3章】

第3章では、第1章で検討した3つの方略と、検証授業①で得られた成果と課題を踏まえ、中学校2年生の男子生徒を対象とした柔道の学習指導プログラムを作成し、その有効性について検証した(検証授業②)。その結果、本研究で作成した学習指導プログラムを適用することで、学習者はプレイヤーならびにアドバイザーの役割を果たすために、学習者同士で相互作用行動を行い、自分や友達の課題を見付

け、アドバイスをを行った。そしてその課題の解決に対して合理的な練習を選択し、仲間と協力して課題解決を行うことができる等、社会性の高まりがみられるとともに、技能の向上も図られた。また、学習者は、プレイヤーならびにアドバイザーの役割を果たすために、学習者同士の相互作用行動を行い、自己の新しい発見や価値に気付くことができる等、自己認識を高めることができた。そして社会性及び自己認識が高まった結果、学習者は自分たちで練習や試合の内容を定め、行動することができる等、主体的な行動が増えた。

【結章】

本研究の目的は、中学校の体育授業を対象に、生徒の人間形成を高めるための学習指導プログラムを開発し、それを適用した授業実践において、生徒の「社会性」、「自己認識」、「主体性」の変容過程を分析することによって、生徒の人間形成の高まりを明らかにすることであった。検証授業①ならびに検証授業②の成果より、「社会性」、「自己認識」、「主体性」の変容に関して、以下の諸点が明らかとなった。

- ・社会性を高めるための学習者間での相互作用行動は、肯定的・矯正的フィードバックを行うとともに、単元を通して、同一の生徒に即時的に行うことで、社会性を高めることができる。

- ・自己認識を高めるグループ学習における役割行動は、役割の内容を明確にするとともに、学習者間での相互作用行動と関連する役割が良いとされる。また、役割を通じて新たな自分の価値や長所に気付くためには、単元終了後に振り返りの時間を作ることが必要である。

- ・社会性及び自己認識が高まることで、学習者は自分たちで練習や試合の内容を定め行動する等、主体的行動が増える。

今後の課題として、本研究での成果が他の領域や種目においても適用可能であるかどうかは不明瞭あること等が挙げられる。

